増補頭書
訓蒙圖彙大成
十

頭書増補訓蒙圖彙巻之廿一

雑類

此部にハ諸天神仙聖賢佛菩薩諸祖師其外人物の部に洩るゝをおぎなひあらはす

二王金剛

○右を右弼金剛と云人の生善をまもる也那羅延金剛ともいふ

○ひだりを左輔金剛といふ人の断悪をまもる也密迹金剛ともいふ佛法の守護神なれバ三門に安置せり

右弼金剛　左輔金剛

○持國天王乾達婆毘舎闍を足下に踏従へて東方を守護したまふ四天王乃第一なり

○増長天王鳩槃荼薜茘多を足下に踏従へ南方を守護したまふ四天王の第二なり

○廣目天王龍及び富單那を足下にふミしたまひて法界を安寧し霧を守護したまふ

○毘沙門天王夜叉羅刹を足下にふミしたまひて北方を守護したまふ又悲多聞天王ともいふ

持國天王

毘沙門天王

○韋駄天は佛法の守護神なり魔王佛舎利を奪とり逃を追欠取返しめしなり禪家には厨に安直を

○鍾馗は唐の明皇夢に臣は終南の進士鍾馗なり天下の虚耗妖孽を厭らんと乃給ふ故よ呉道士に命して其形を圖せしめ天下に傳ふと云

新
鍾馗

新
韋駄天

○辨才天女
衆生に智恵福をあたへ玉ふ神なり琵琶を弾じたまふ相とうつくしみを妙音天女ともいふ

○福禄壽
福神なり天南星といふ星乃化現なり頭かゞくして拄杖に経巻を結そへてもてり鶴を愛すと又麋鹿を愛すともいふ

大黒天

○八万四千の眷属あり貧困を轉じて福者となさんと誓言たまへ摩伽羅神ともいふなり

蛭子

○伊弉諾尊の第三の御子日の神の御弟西宮蛭子三郎殿といふ也市の賣買を守りたまふ御神なり

大黒天

蛭子

布袋

○支那の散聖にて弥勒菩薩の化身なりといへり常に布の袋を負てあそべるゆへに布袋和尚と名づけたり

寿老人

○福神の一なり老人星の化現なりといふ白髪にして帽子をかぶり手に杖をとりて鹿を愛すと

○伏羲氏唐土の帝王大聖人なり此人生れ始めて網罟を作て猟漁を民に教へ又書八卦琵琶琴を造たまふ

○神農氏ハ同帝王にて聖人なり民に五穀を作事を教へ又市をなし交易の利を極しむ帝草木を味ひ寒温平熱の性を察し人身の病を療ずる事を教へたまふ此より醫道おこる

神農

伏羲

○倉頡ハ黄帝の代の人なり眼四ツあり鳥の足跡にかんがへて始て文字を作る是文字の祖なり

○黄帝ハ軒轅氏といふ蚩尤といふ逆臣を亡し帝位に即給ふ聖人也此時より暦算律呂宮室書契冠服等ことごとく具る又始て舟を作り給ふ元妃に命じて蠶業を教給ふ

○孔子は唐土周の代の人
堯舜の道を弘め五常
と教ゆる文宣王ともいふ
儒宗の大聖人なり
○老子は周の代藏室
の史たり生まれながら白
髪なり道経五千言を
著し無為自然の道を
教ゆる道士の大祖神人
なり其終をしらず
○許由は堯帝位を譲
らんとのことを聞て其耳
汚れたりとて潁川の滝に
いたり耳を洗し賢人なり

孔子
老子
許由

○維摩居士ともいへり
これ拂子を持方丈
の内に八方の師子座
をかざり三千の大衆を
入て法門をとし給へて

○山越の弥陀ハ比叡山
横川の峯で阿弥陀仏
の尊容を現じ給ふを
恵心僧都拝しあひて
寫しのひろまりや

○聖徳太子ハ人王卅二代
用明天皇の皇子なり
卅四代推古天皇の御宇
摂政として日本仏法の
綱なり守屋とせし摂政
天王寺を建立し給ふ

山越弥陀

維摩

聖徳太子

○出山の釋迦ハ如来十七歳にして出家し三十歳の御時十二月八日明星の出るを見廓然大悟ましまし正覚を成たまへり

○誕生佛ハ釋迦如来卯月八日寅の刻に誕生しまし七歩あゆミ御手乃ただ左右の手にて上下をゆびさして天上天下唯我獨尊とのたまへりとかや入滅ハ二月十五日なり

誕生佛

出山釋迦

○初祖達磨ハ梁乃武帝にまみえ給はずつゐに魏の少林寺に入されハ世に芦葉達磨とも又ハ一葦乃達磨ともいふ

○不動明王右の手ニ利剣を持ち左に縛の縄をとれるハ衆生乃邪悪をいましめんためとかや座し後の岩ハ動ぜぬかたちハ頑人の怒れるをおどし示しおさむるべし

○龍猛菩薩ハ南天竺に出生釈尊より八百年後なり真言宗第一の祖なり大日経金剛頂経蘇悉地経弘めらる

○善導大師ハ唐土長安の人なり出現志あり三十余年少も睡眠せず唐永隆二年三月十四日遷化

○天台大師ハ陳隋二代の国師唐土天台宗の開祖十一月廿四日六十歳にて入滅智者大師ともいふ

龍猛

善導大師

天台大師

○六祖大師ハ唐土にて達磨より第六祖諱を恵能此下より禅宗五家に分る大鑑禅師ハおくり号なり

○傳教大師ハ最澄ともいふ日本天台の開祖なり延暦廿一年に入唐五十六歳六月四日入滅

○役行者ハ役小角ともいふ和州の人葛城山に入て孔雀明王の法を行ひ後ハ母を鉢入て入唐したまふ

傳教大師

六祖大師

役行者

○寒山子ハ始豊県の人
天台山に隠れて常に
拾得と法友たり後に
去所しらず文殊乃
化身なりといふ
○拾得ハ豊干禅師乃
道のほとりに拾ひ得
たる人ゆゑ拾得といふ常に
寒山とはじかる其の縁
とおなじ人なし
○巨霊人ハ大力神通
を得たる仙人なり山を
擘の力あり常に白虎
を友とせり

○費長房ハ後漢の代の人なり仙術をまなびよく白鶴にのりて雲中を飛行しあそびける仙人なり

○琴高ハ神仙の術を学びて其功なり大いなる鯉に乗して水上を飛行し書をよくまなびける仙人なりといへり

費長房

琴高

○太公望ハ尚父とも云又渭濱に釣して世をさける隠士なり後ハ八十余歳に及で周乃文王その賢をしりたまひ師としたまひ同武王に兵を教て殷の紂王を亡しめ給ふ

○上利劔ハ劔を乗して大海の波上を飛行する術をえたるといへり

上利劔

太公望

○張九哥は宋の代に都に居し冬月にたゞ単の衣きたりけり帝あやしとて召て酒を飲しむる日奏ふすまへいるとて鳥紙を蝶のかたちに剪て是を放せば悉く飛さりける又招けばかへりて元の紙となりしとなり

○鐵拐仙人は虚空にむかつて己がかたちをふきいだすと郷を描さなせし仙人なり

○蝦蟇仙人は除ろに蝦蟇を愛せるゆゑに其名を得けるとかや

張九哥

鐵拐仙人

蝦蟇仙人

○西王母は仙女なり
前漢の武帝に桃を
すゝむ味甚美なり帝
核を植んと有しに王
母の曰此桃三千年に一度
花咲実のる一つ食を
すれバ三千年の寿をたも
つと東方朔此桃を三ッ
ぬすミ食せりとぞ
○通玄ハ張果呂とも
いふひさごの中より駒
を出すの術を得たりし
仙人なり

西王母

通玄

○天人ハ首の花曼しぼむことなく羽衣に垢づくことなくさまたゝえせざるや然ども命終るときハ楽つきて五衰のかなしみあり

○迦陵頻ハ天上の鳥なり天人の面のおゝく声をもちて美くしよろしく妙声鳥又好音鳥ともいへり是佛經の説なり

迦陵頻

天人

○和歌ハ此国の風俗を
志て三十一字ルかをつゞ
詠んかハ称して情を
述ぶる事実をもつて
を故に仏神も感応
有りての徳ある哥也
それ和歌ハ神代より
始りといへども素盞嗚
神も哥の神と崇め
奉り衣通姫人麿赤
人を哥の祖神ともと
ゐ後よ俊成定家家
隆のごとき哥人数多在
て秀哥多し

和歌三神

衣通姫

赤人

人麿

○詩ハ唐土よりおこる故ニ唐をおよそ其詩ハ和歌におなじく六義あり五言七言とて五字七字に作り絶句と律とありよく其情を述て人心を感ぜしめ實をあらはす事詩の二ツにちがひあり白居易あざ名ハ樂天晩唐の詩人なり蘇軾字ハ子瞻東坡と号ス宋の代の人なり

詩人
白樂天

東坡

○筆道ハ唐土の文字より漢字といふ晋の王羲之筆法の祖にて石面に書をきざめバ墨石へまでとほりて入しといふ日本にてハ嵯峨天皇弘法大師橘逸成是を三筆といふ道風佐理行成を三跡といふ何れも筆力の名誉後世に残る其筆跡ハちかごろ尊円親王の筆跡御家流と称して今世に習ひけるなり

筆道

晋の王羲之

小野道風

○琴ハ伏羲の作り始メて五十絃又廿五絃あり瑟といふ楽器に用を和琴といふ又世に翫る十三絃の琴をよくし琴といふ音曲おほくべよど多くあり

○香ハ清浄潔白の徳ある物にて穢をさる故に神前仏前にて焼なるその香遠きにかをる伽羅ハ水に入てしづむ也よつて沈香といふ唐土よりきたる

琴

香

○鞠ハ唐土女媧氏乃代に逆臣蚩尤といふ者謀叛を企軍に及しが女媧子ハ女帝ながら聖徳あきが万民なびき従ひ終に蚩尤を討亡しめ其頭をそ孫くり諸人蚩尤を悪みて頭を蹴たり是鞠の始とかや鞠のかゝりの松楓柳桜の四本を植るかり飛鳥井家難波家鞠の師家なり上賀茂社家松下一流あり

蹴鞠

○目利ハ墨跡古画又
万の器の真贋をよく
見分る人をいふ古筆見
とも名付剱の目利ハ
本阿弥家にて其家あり
○算術ハ万法よりおこり
貴賤ともになくてならぬ
ものなり天地五運
の行るも算数を以て
考へ或ハ万里の数を知
る事も皆算勘の術
なり殊に人間日用
算勘の道ハわけて
ぞんずべし

○諸礼は人倫の主なり
人として礼なくてハかなハざる事なり聖人の教にも六藝とて六ッの礼楽射御書数の中にも礼を重じたまふこの国にては礼儀の作法ハ将軍義満公の御代より始まりて小笠原家の諸礼といふ又躾方ともいふ仕官の人ハ勿論の事貴人にまじハる人ハかならずかゝかね藝なりまなびならふべき事也

弓

○弓ハ射藝をもつて武士の家に生るゝ人ハ射藝を学ばずんばあるべからず武士を弓執といふなり唐土に楊由基といふ弓の達人ハ百歩下りて柳の葉を射に一葉も射そんぜし事なしとぞ我朝においてハ鎮西為朝能登守教経那須与市等弓の達人なり其外数多精兵の射てあまたありし

○馬は乗馬の法なり
是武士の要たるをもて
師伝を受て習ふべきこ
と肝要なり功者ぶる
者によりて悪癖も
ありく曲馬の心得
百曲ありとりや駒の
いろ曲の乗しやう格式
ありくひろしよりも八条
流あり今世大坪の一流
とおるにならひて武士の
要たるとするの淡姻も
たやすくより大河の流
も先る事優るの徳也

○剱術ハ太刀打の
法なり兵法ともいふ
是武士第一の藝也
流儀あまたあり新
陰流柳生流新影
流一刀流なと多く
あり徒来盤の藝を
学ぶ身の免をとり
門人に教へる
有き事にあらずや
今静謐の御代なれば
おのづから商家職人
農人等は志しねて
そなふべし

剱術

○圍碁ハ周公旦作りたりと云吉備大臣入唐の時傳来といふ三百六十目ハ年月日數之九目星ハ九曜の星石乃黒白ハ晝夜を表するなりとぞ

○将棊ハ周の武帝臣下王褒に命じて作らしむ軍法の術をうつせしものなり大将棊中将棊あり今もてあそぶ所小将棊といへるハもとよりなりしものなり

將棊

圍碁

○茶湯はむかしよりもある事なれども茶亭数寄屋と号し草木の植やう料理にいたるまで法式を立てきびしくなりしハ千利休よりぞはじまり古田織部小堀遠江守など茶道の達人其流多くあり人倫の規行儀をまなぶの一助なり元来茶道ハ奢をいましめ数寄ハ質素をもつぱら本意とすといふ

新 茶湯

○立花ハ京六角堂
の別當池坊立花の宗
匠なり毎年七月七日
に門弟参集して立
る貴賤是を見物す
又抛入の傳ハ近く師
あり今世なげ入ハ立
おこなハるゝ花の會
多し宜なるかな花
ハ人の心をなぐさめ
精氣をさんずるもの
なれバよきなぐさみ
貴賤のもてあそびと
なるもことハりぞし

立花

○山伏を修験道とも
いふ真言の法なり行を
修し身をこらし又霊
山大山へのぼりて行ハ
なかになかり者ハ天文易
学をまなびて諸人の
五運八卦をうらなひて其筋
吉凶病の軽重失せ物乃
方ぐく気悪ふまさ
一流修行者の法は修
きうめのわんく是は行者
の生業とふ人の病を
行術を始離場わりもと
行者がりといふ

山伏

○鷹は唐土五帝の時
よりまづ賞ぜるとかや我
朝にはわたりしは神功
皇后の御代に百済
国より始めて鷹を奉
る其後仁徳天皇の
御代に唐より鷹を
献ぜしかば御猟を催さ
せ諸鳥をとらせ玉ひた
まふ是鷹狩のはじ
めなり鷹は勇気さ
かんにして武備の鳥
なれば武門に賞する
よく事宜なり

鷹匠

○能はむかしよりある
事なれども其傳ヒ
かならず後小松院乃
御宇に観世世阿弥と
いふ者公方家の能を
まふそめけるに其業後
に今春保生金剛となる
て四座といへり又猿楽
といふ事ハ猿田彦の始
謡のはじまりとかや謡ハ
日本性具の始一にして
神祇釈教恋無常故
事世の諸まく来集
むるりのなり

能之

太夫 をそくともいふ

地謡 同音ともいふ

脇

○笛小鼓大鼓太鼓
是を四拍子といふなり
笛は漢武帝の時丘仲作る
とや鼓は秦の穆王の
作なり大鼓は湯王の
臣なり小鼓は陰にして
律なり是陰陽和
合の器なり又太鼓は
黄帝の時夔を殺し
其皮をもつて作れり
とや或は云黄帝蚩
尤とたゝかふ時玄女帝
のために夔牛の鼓
を作れりといふ

笛

小鼓

大鼓

太鼓

○狂言(きやうげん)ハそのはじまり
清まびらかにしこの中
乃与へ入る事ハ氣(き)随(ずい)
軽(てん)じて笑(せう)ひをもよふすを
専(せん)とするなるべし能(のう)を
はじく流義(りうぎ)のならひ
ありくかしのうちをさ
め狂言(きやうげん)のうちに伝授(でんじゆ)
とするものありそのさ
狂言の本意(ほんい)ハ狂戯(きやうげ)と
為(ぜん)として人の心をなご
やはらげひとおこさせ
を要(よう)としけるものなり
とかや

狂言(きやうげん)

○浄瑠理ハ小野お通
抑始る。お通ハ信長公の
侍女なりし参州矢作
浄瑠理姫が事を作る
岩舩検校ふしを付く
是を浄瑠理といふなり
其後滝野沢角の両
検校三線に合せて曲
節をつくる又慶長の頃
より浄瑠理太夫の受領
といふ事有たり
京大坂江戸に浄瑠理
太夫多くありて色々の
流義出来せり

○三絃は元来琉球
国の楽器なるよし
三味線とも書なり
近世諸国ともに此三
絃をもてあそぶ事ある
なり[illegible]これあれ
ども調子におほく自
由なるの器なり故に音
月花の楽ミその余乃
遊興いづれも三絃をもて
一曲を要とし又小弓を
いふものハ三絃より作り
出せるものなるべし

○芝居ハ其おこりハ河原の芝にござかんど を敷物として狂言を いたしたるゆへにて今の 殺下しなとゝは數 のおかりしが次第に高 上なりて衣服器物 までも花美を盡して 立役女形敵役なとく それぞれ役をわけて 三ケの津にハ常芝居 をゆるされ諸人の慰み となりぬよつて芝居 と名づけたりぬ

芝居役者

立役

女形

敵役

○人形芝居はあやつりと
もいふ名ありそめしわる
人形浜条にくはゑ
つかひし事ありしが
加者出て今は目出度
ゑびすさまを事とせし
わかりごとし難波竹本
豊竹の両芝居をもとゝ
をようをさまりて又
難波に竹田といふからく
り人形の芝居あり其
志き細工をなして人の
目をおどろかすことのよう
よかり

○軽業はむかしより其
伝ある事にや始をしら
ず誠に危き業なれ
ども○合手練のこと
にく上手あまた出て
人の目を驚かしむる
といへどもやくもなきわざ
怪我あやまちなどのなき
きさんなるまといひよの
一つのとまるに似し
よんを知るざしとすべて
世俗にきこゆるとしく細
稚の時より仕をこされ
ゆるがせならざるべし

○鉢扣は元祖空也上
人なり今下京空也堂の
脇に住居して茶筅を
けづり作業とす十二
月十三日より京町中を
賣ありく正月大ぶくの
茶筅もこれを吉例として
て求る事なり
○鹿嶋の事觸といふ
は毎年春鹿嶋大明
神其年の吉凶人々の
身の上五穀の善悪等
神託あるを諸國へ觸
ありくものなり

鉢敲

鹿嶋事觸

○猿舞ハ始の紀あると
かうきし今京都へ
来るハ伏見の者なり
出つらし年乃始ふ
御所方へ嘉例とし
てよろこめでたき事
を舞しむ又田舎にて
牛馬を飼所ハ秋入の
時分きたりのぼれと
て舞をなしむる其故ハ
猿ハ山乃父と称じ馬ハ
山の子といへばなりと
ある人の説を書に
見えたり

猿舞

○万歳楽ハ年の始よりめでたき例とせり古へて絵ひまふありけりよりも有来りぬるよし聖徳太子の御時に烏帽子装束を下しありし例よりて今に烏帽子素襖を着るとぞその初へ昔ハ大和より出る農人なりしとかや御と万歳といふハ中古へ下京法より出東國へハ三河の国よりもいづるとぞ

万歳楽

夫宮室衣服動植飛沈凡百器用以文字寫貌其状則苦搜力索勞得至彷彿求之圖繪則一目瞭然思已過半矣故古人之講學必也右書左圖圖書並稱所從來尚矣惕齋先生所著圖彙至意所屬蓋亦在乎此其書奚翅訓導童蒙云爾雖宿儒老學亦有資以廣致格之識家珍人藏良有

以乱。從寛文逮今。殆百幾十年。版已
就刓缺。今茲寛政己酉。額田氏主人
囑下河邊氏。移寫舊様。再刻剞劂。而
精工縝密。視舊有信爲。刻成。請余以
一語。余謂近有春朝齋山城名所圖
會。亦以圖繪之故。盛行乎世。朝摺暮
印。洛陽爲貴。彼實不過一臥遊之具
而已。猶且見賞如斯。況之大有益之

書。非徒供於目翫也。具必與彼並驅。而超乘過此。如指諸掌。余預為額田翁化賀。翁至記而驗之。

己酉四月　春莊端隆

寛政元年己酉三月吉辰　出来

皇都書林　九皐堂　壽梓

訓蒙圖彙　大本　全八冊

同本小本　全四冊

同増補頭書　全八冊

同増補頭書大成　全十冊

寛政元年出来　下河邉拾水子画圖

同増補頭書大成拾遺　全五冊　嗣出

三才千字文　訓蒙字彙の目録と幼童の素読にて文字を覚ゆるに便りよし

村上勘兵衛
出雲寺文治郎
今井七良兵衛
額田正三郎
勝村治右衛門
泉吉兵衛
小川太左衛門
小川源兵衛
谷口勘三郎